

資料

ヒポクラテスの医学教育

齊藤 博

Medical Education According to Hippocrates

Hiroshi Saitoh (Department of Urology, Saitama Medical School, Saitama Medical Center, Kawagoe, Saitama 350-8550, Japan)

Hippocrates stated that “the learning of medicine may be likened to the growth of plants. One who is truly will acquire an understanding of medicine must enjoy natural ability, teaching, a suitable place, instruction from childhood, diligence, and time. Now first of all natural ability is necessary, for if nature be in opposition everything is in vain. But when nature points the way to what is best, then comes the teaching of the art. A medical education includes geometry, mathematics, astronomy, and environmental medicine in addition to medicine. As to diseases, one must make a habit of two things: to help, or at least to do no harm. The art has three factors: the disease, the patient, and the physician. The physician is the servant of the art; the patient must work together with the physician against the disease”. Medical education according to Hippocrates is the origin of medical education, just as medicine according to Hippocrates is the origin of medicine.

Keywords: Hippocrates, medicine, art, education*J Saitama Med School 2004;31:137-146*

(Received February 12, 2004)

緒言

ヒポクラテスは紀元前460年頃、ギリシアのコス島の生まれで、医神、医聖とも言われ尊敬されているが、ギリシアの哲学者ソクラテス(紀元前470?-399年)とほぼ同時代の人物である。ヒポクラテス関係の著述は、医術が主であるが、哲学、倫理、自然科学の全般にわたっており、後年、『Corpus Hippocraticum』(『ヒポクラテス全集』、『全集』)¹⁻⁴⁾として編纂され、多くの医学史で概説が述べられている⁵⁻¹⁰⁾。医学の著述はそのまま医学教育の著述ともいえるが、『全集』には医術の教え方、医学教育論とでも言うべきものがある。本論考では、ヒポクラテスの医学教育論を検討し、臨床医の立場で、医学教育とは何か、どのように教育すべきかを考察した。

方法

医学教育を5種類に分類し、1. 医師になるに当たっての心構えと、医師になるための教育、現在で言うところの基礎部門を含めた医学部での卒前教育、2. 一人

前の医師になるための教育、いわゆる、卒後教育、3. よりよい医師になるための医師の心得、生涯教育、4. 生死に関する教育、死亡教育と、5. 医学教育とは直接関係しないが、ヒポクラテスの医の本質を、ヒポクラテスの医としてまとめた。

本論考では、原典はLoeb版¹⁾、訳文は大概真一郎編の『ヒポクラテス全集』²⁾から、一部は、今裕訳の『ヒポクラテス全集』³⁾から、主に、医学教育、教育法に関する部分を取り出してまとめた。「」は、その個所の全文引用(訳文のまま、前略、後略はある)、「・・・」は中略、「」のない引用は、その部分の著者の要約、脚注は『全集』²⁾における注で、注釈者名を記した。カタカナ表記は引用に従ったので、異なる場合がある(例:ギリシア, ギリシャ, ギリシヤ)。

1. 医師になるにあたっての心構えと卒前教育

1) 医師になるにあたっての心構えとしては、まず、「誓い」(「ヒポクラテスの誓い」)が挙げられる。

「医神アポロン、アスクレピオス、ヒュギエイア、パナケイア、およびすべての男神・女神たちの御照覧をおおぎ、つぎの誓いと師弟誓約書の履行を、私は自分の能力と判断の及ぶかぎり全うすることを

誓います。」で始まる誓いは、以下、医術を教わるにあたり、「先生に対しては両親に対すると同様にし」と、医師の掟に従う師弟関係の誓い、医療に関する誓い、禁忌事項が述べられている。切石術は行なわないとある。(誓い)。

- 2) 医術 (τέχνη¹⁾, テクネ, 術, 技術), 医師の技術とはどのようなものか, 医師は医術に奉仕する者 (ὑπηρετής, ヒュペレテス) であることと, 医師と患者との関係が述べられている。

「ヒポクラテス, 医術はすばらしいし, 生活に役立つものであるから, 人々はみなこれを習得するようすべきである。」(書簡集23 デモクリトスがヒポクラテスに人間の体について語る)。

「はじめに, 私が医術をどんなものと考えているかを定義すると, 医術は一般に病人から病苦を取り除き, 病気の激しい勢いを和らげるものであり, さらに病気に負けてしまった患者に対する場合, 医術の力ではどうしようもないと知ってやたらに手を出さないようにすることである。」(術について3)。

「われわれ医者, 自然と術が与えてくれる手段によって克服できる事柄を扱う専門家であることはできても, それ以外の事柄を扱うことはできない。」(術について8)。

「過去の症状を説明し, 現在の症状を理解し, 将来を予測すること. 以上のことに習熟すること. 病気に関しては次の二つのことを行なうこと. すなわち, 患者を救うかあるいは傷つけないようにすること. 医術はつぎの三つから成っている. 病気と患者と医師である. 医師は医術に奉仕する者である. 患者は医師と協力して病気に対処するようにしなければならない。」(流行病1-5(11))。

- 3) 医学教育を受けるにあたっての六つの条件, とくに, 資質 (φύσις, ピュシス), 教育 (διδασκαλία, ディダスカリア) と教育の場 (τόπος, トポス) の重要性が, 述べられている。

「医術の知識を本当に身につけて自分のものにしようと思う者は, つぎの条件を満たしていなければならない. すなわち, 生まれつきの資質, 教育, および教育にふさわしい場所, しかも幼少からその教育を受けること (παιδομαθίης, パイドマティエス), それから勤勉と年月 (の六つ) である. ここでまずはじめに必要なものは生まれつきの資質である. というのは, 資質がふさわしくないならば, すべては無駄になってしまうからである. しかし資質が申し分ないとすれば, つぎにくるのはこの術の教育である. この教育は, 教育に適する場所において, しかも幼少のころから, 慎重を期して授けられねばならない. さらにこのように教育が植え付けられることによって, 立派で豊かな実りを得るためには, さらになお長期にわたりずっと勤勉であることが必要

である。」(法, 医の本分2)。

「医術を習得するということも (μάθησις, マテシス), 実際のところ, 大地に生えるものを見守るということに通ずる. 資質は土壌, 教説は土壌にまかれた種. ちょうど良い時期に種が耕地にまかれること, 教育を受ける場所は養分, 勤勉は毎日の耕作, 年月は種から最後まできちんと育つよう強化育成するものである(法3)。

「— もっとも指導的な役割を果たすのは天分 (φύσις, ピュシス) である. というのは, どんな術にたずさわるにしても, 天分がそなわっていると, …, 立派にやりおおせていけるからである. 知恵においても術においても天運 (大槻マミ太郎脚注: χρέος, クレオス, 人が当然支払うべき義務, 役立つもの, 運命, 死の意味もある) による効用は教えられるものではないからである。」(品位について4)。

- 4) 卒前教育には, 医学以外に, 基礎科目として, 幾何学, 計算学²⁾ (数学³⁾) の必要性が説かれている。

「息子よ, お前は幾何学と計算学とを学ぶように心がけるべきである. なぜなら, それによってお前の人生は名声を得て, また人間にとって大いに役立つものとなるばかりか, 魂のほうは, 医術に必要なすべてを得ることが出来るよう, 明敏で, また先のことまで見通せるようになるのだから。」(書簡集22 ヒポクラテスが息子テッサロスに語る)。

幾何学は証明をもっておわるのであるから, 骨の位置, それが脱臼したときの状態, そのほかからだの各部の配置をしるのに役立つだろう. 計算の規則は, 熱病の周期や一定した変化, 病気の分利 (小林晶子注, 分利について, κρίσις, クリーシス: 病気が快方に向かうか悪化するかの分かれ目), 病気の安全性を知るのに十分応用できるだろう. ……こうした補助手段を医術とともに心得ているのは, とても有益なことである(書簡集22)。

- 5) 医学の基礎と簡単なことから勉強する. 診療所内での治療から始める。

「医療に熟練するための医術上の心得に関しては, まず人が学び始めるその内容を, はじめからよく心得ておかななくてはならない. さて, 学び始めの人たちのすることは, まずは診療所の中での治療 (θεραπεία, テラペウオ) である。」(医師について2)。

「はじめに, もっとも顕著なこと, いちばん簡単にわかること, あらゆる手だてによって確実に知られることから, 正常か異常かを識別する。」視覚, 触覚, 聴覚, 鼻, 舌, 知覚によって感知し, 知識を獲得する手段となるすべてのものを通して認識できるようにする(診療所内において1)。

2. 一人前の医者になるために, 卒後教育

医療の実際, 医者への態度, 実地訓練, 戦陣医学, 食

餌療法, 医学以外の学問, 病歴記載の重要性について述べている。

1) (法2と3)が卒前教育とするならば, (法4)は卒後教育に相当すると考えられる。

「さて以上に述べた(六つの)条件(法 2, 3)を身に備えて医術を行なうようになり, 医術の知識を正しくみにつけ, こうして町々を訪ねるような人こそ, 名実ともに医師としてみとめられなければならない。・・・無知無経験は無用の財産で, 臆病と無鉄砲を生む。臆病は無力, 無鉄砲は術がない。道は二つある。本当に真理を究めるか, それともただの憶測にとどまるか — 前者は知識を, 後者は無知をもたらす。」(法4)。

2) 医師はそもそもどうあるべきか, どのような態度, 風貌が医師としてふさわしいかにも触れている。

「医師の風貌としては, 見るからに健康な顔色で, 彼自身の本来の資質にふさわしい肉付きの良いことが望まれる。」(大槻マミ太郎脚注, πρόσταριη, プロスタシエ, 権威, 威厳, 品位, 風格, 風貌の意味もある)。

以下, 清潔, 身なり, 心もち, おしゃべりでない, 生活を秩序だてる, 教養, 人を敬い愛する気持ちを持つようにとある(医師について1)。

「医師はある生き生きした雰囲気といったものをみにつける必要がある。しかつめらしい固さは健康な人にも病人にも拒絶的な感じをあたえるからである。」(品位7)。

3) 医術の習得には長い修練がいる。戦陣医学は出征して, 実地訓練の必要性があると述べている。

「医術の習得は長い修練なしには不可能である。というのは, 医術においては, それぞれの場合の治療法が一定したものになることはありえないからである。それに対し, たとえば正書術であれば, 教えられたとおりの方法を学ぶだけで, それについてのすべての知識を手に入れることができる。またその知識をもっている人なら誰でも同じように書くことができる。」(人体の部位について41)。

「いろいろな学説の検索を懸命に手がけることではなく, 実地の修練のほうが有用だということである。」(医師の心得13)。

「町で生活する場合は, こういう傷(戦場で受けた傷)の治療をすることはあまりない。・・・こういうことは外地に赴く傭兵に関しては非常に頻りに相次いでおこるものである。だから外科治療をしようとする者は, 軍隊に加わり傭兵といっしょに出征しなければならない。」(医師について14)。

一方, 文献を調べることも大事と言っている。

「文献を正しく調べる能力もまた医術にとって大切なことである。・・・なぜなら, 思うにそれを理解し利用すれば, 医術においても大きな失敗をせず

にすむからである。」(分利の日について1)。

4) 治療では食餌法(δίαίτα, ディアイタ)が重要と考えられる。運動, 散歩, 走行や, 運動と食事の関係について述べている。

「私が力説したいのは, 人間の食餌法について正しいことを書き記そうとする者は, まず人間一般の自然性を知り, そのうえでなおよく知らなければならない, ということである。・・・食物と運動には相反する効力があり, それらは互いに補い合って健康に役立っているのである」(食餌法について第一巻2)。

「多少悪くとも, 患者の好む食物の方が, 善くとも嫌いなものよりその人の為になる。」(箴言2-38)。

「食餌の制限にあたって, 長期の処置は禁物である。患者の自然の欲求も長期に及ぶからである。・・・長期の病気にも寛大さが必要である。」(医師の心得14)。

5) 医学以外に, 天文学, 環境医学の必要性が説かれている。

「医術を正しく探求しようとする人のしなければならないことは, まず, 一年の各季節がそれぞれどんな影響力を及ぼすかをよく考えてみることである。」(空気, 水, 場所について1)。

「医師は天文学が医術に非常に少ないどころかじつに多大の貢献をしていることを学びとることができよう。なぜなら, 人間の病気も腹の器官もそれぞれの季節とともに変化するからである。」(空気, 水, 場所について2)。

「つぎは水, つまり病気をおこす水, 健康に非常に良い水, また水からどれほどのわるいことが, またどれほどのよいことが生じてくるか。・・・健康に対して水の影響するところは非常に大きいからである。」(空気, 水, 場所について7)。

6) 所見の記載の重要性が説かれている。

「個々の患者からどんな症状であるかを聞きとりさえすれば, 医術の心得がないものでも正確に書き記せるであろう。」(急性病の摂生法について1)。

「さて記しておく価値がとくに高いと私が思うのは, 医師の知識として重要であるにもかかわらず, 考察されていないことで, 知っているとじつに有益だけれども, 知らないととても有害な結果につながる事柄である。」(急性病の摂生法について3)。

3. より良い医師になるために, 生涯教育

よりよい医師になるための医師の心得, 医の倫理は, 生涯教育に関係する部分としてまとめた。

1) 高齢になっても, 医術を修めなければならないと述べている。

「私はすでに老齢であるというのに, 医術のほうはまだ完成に至っていません。医術の創始者である

アスクレピオスですらそうだったので。彼自身もまた多くの誤りをおかしたのです。」(書簡集20 ヒポクラテスがデモクリトスに挨拶をおくる)。

- 2) どのような医師になるべきか述べている。神々への畏敬の気持ち、治療に適した時期について述べている。

「医術がそれとして正当に評価されるのは多くは神々によってである。医師たちは神々に畏敬の気持ちをもって従ってきた。というのも、医術のなかにある力は途方もなくすばらしいものではないからである。確かにこれらの医師たちは多くの病気を処置するけれども、多くのものが彼らにとっては自然的に克服されてきたのである。」(品位について6)。

「医術はその全体がすでにみいだされている、と私には思える。医術は現にあるとおりのものであり、それぞれの場合に病気の性質や治療に適した時期を教える。実際、このように医術に精通した人は、幸運を当てにすることは少しもなく、幸運があるうとなかろうとうまくやってのける。」(人体の部位について46)。

- 3) どのように治療すべきかを述べている。痛みがないように、無難な処置を選ぶ。

「私が言いたいのは、医術にたいしてはその全体に関心を向けるべきだということである。」立派さや正確さをもちまえとする処置ならば、りっぱに正確に、迅速さがもちまえなら迅速に、痛みを感じさせずに施すべき処置ならばできるだけ痛みがないように、それらの処置を、医師たちのなかでもっともすぐれたものとなるように心がけて行なう必要がある。(急性病の摂生法について2)。

「医術は、それ自体のなかに治療の助けとなる豊かな理論をもっていること、・・・言葉よりも実際の仕事によって示すことを好む。」(術について13)。

「病人に処置を施す際、早急に決定することも有用な場合がある。・・・何らかの処置の一つだけでも処置を施しておけば、役に立つ場合があるからである。しかし早急な決定は変動を受けやすい。」(医師の心得3)。

「医術全般にわたってもっとも高く評価されるべきことは、病んでいる部分をどのようにして健康にするか、ということである。もし健康にするのできる方法がたくさんあれば、いちばん無難なものを選ぶのがよい。実際、それこそが、俗受けのするいんちきを熱心に求めることのない者にとっては、いっそう立派な人物たるにふさわしいことであり、また医術の心にかなっているからである」(関節について78)。

「健康人に適するものは病人に処方すると強すぎる。したがってその強すぎる分だけ除去してから与えなければならない。さもないと体そのものが耐

えられず、有益であるよりもかえって有害である。」(疾病について61)。

- 4) 医術を行うに当たっての医師の心得、責任が述べられている。不適切な治療をしないよう述べている。

「医術を正しく行なわない者たちがその報いを受けたとしても全く当然のことだろうが、実際にそれを受けるのは何の罪もない患者たちなのである。つまり、病気の力も、医師の無経験がそれに加わらなければ、患者に対して明らかにひどい暴力は発揮しなかったはずである。」(医師の心得2)。

「医術において不適切なこと。ある病気を別の病気と言う。重病を軽い病気と言う。軽い病気を重病と言う。助からない患者なのに助かると言う。膿がたまっているのにそのことがわからない。体内で大病が進行しているのにそれがわからない。薬が必要なのにどんな種類の薬かわからない。なおせるのになおせないと言う。なおせないのになおせると言う。」(疾患について1-6)。

- 5) 他の医師との関わり方として、他の医師を批判してはいけないとしているが、先生に対する批判の記載もある。

「ある医師が、ある患者の病気の現状に対する策に窮したり、未経験なためにはっきり決めかねるようなときは、他の医師たちに応援をたのみ、相談して病人の病気の内容をよく調べ、救助しやすい協力態勢をとろうとしても、それが医師たる者の品位をそこなうことにはならないのである。・・・ところで、会ったときは(他の医師との対診³⁾)お互いにけっして功を争ったり軽蔑してはいけない。」(医師の心得8)。

「ヘロディオスは、熱病患者に対して、走らせたり、長時間レスリングをさせたり、蒸気浴をほどこしたりして死なせてしまった。ひどい話である。熱のあるときは、レスリングや散歩や走行やマッサージは禁物である。そんなことをすると苦痛がかさなり、血管はふくらんで赤くなって溢血するし、顔色はきいろくなるし、側胸部は、炎症はおこさないけれども痛むことになる。」(流行病6-3-18)。

4. 生死に関する教育、死亡教育

病気予測、とくに、死亡を予知することは重要である。「ヒポクラテス顔貌」、「ヒポクラテス死相」^{10,11)}に関する記載は有名である。

「医師が病気の予測を仕事としていることは非常にすばらしいと私は思う。実際、病人のそばにいて、その症状の現在と過去と未来の様子をあらかじめ知り予言して、患者がつい言いもらしていることまですっかり説明してやれば、病人のことをよく知っているといっそう信頼されるようになり、こうして人々はあえて自分の体を医者に委せる気になるものである。」、「す

べての病人を健康にすることはできない。」、「人間は死ぬものである。」、「やがて死ぬ患者と助かる患者とを予知しあらかじめ言っておけば、やたらに責められずにすむだろう。」(予後1)。

「鼻がとがり、目は落ちくぼみ、こめかめがへこんでしまった、耳は冷たく縮み上がり、耳たぶは外側に反り返り、顔の回りの皮膚は堅くこわばってかさかさしており、そして顔全体の色が黄色か、どす黒いか、蒼白いか、鉛色になっている。」(予後2)(ヒポクラテス顔貌に関する記載)。

救うことのできない患者に対しては、(術について3)に続き、「病気のために死ぬ人がいる以上、病気がなおるのは運によるものであって医術のおかげではない」、「病気に負けてしまった者に手を出そうとしない医者があることを理由に医術を非難する人たちがいる。」に対する反論として、「この専門職に熟達した人は、このような愚か者たち—彼らが医術を非難しようと賞賛しようと—を決して必要とはしない。むしろそういう人が必要とするのは、自分たち専門家がその役割を十分に果たすことができるのはどこまでか、どういう点が不十分のままであるか、またそうした不十分な点のうち何が専門家の責任で、なにがその働きかけるもののせいなのかをころえしている人たちなのである。」と述べている。(術について4, 8, 9)

5. ヒポクラテスの医

ヒポクラテスの医は、知を愛し(哲学)、術を愛し、人を愛することが、医の本質と考えられる。

「医術はすべての術のなかで最も卓越している。」(医の本分1)

「人生は短く、術のみちは長い。機会は逸し易く、試みは失敗すること多く、判断は難しい。医師は自らその本分をつくすだけでなく、患者にも看護人にもそれぞれのなすべきことをするようにさせ、環境もとのえなければならぬ。」(箴言1-1)。

「時間は好機を含んでいるが、好機にはごくわずかの時間しか含まれない。治療(ἄκεις, アケシス, 治療, 治癒)には時間がかかるが、ときとしてそれは瞬時の好機にかかわることでもある」(医師の心得1)。

「病気を癒す者は自然である。自然(φύσις, ピュシス)は、癒すてだてを自分で見つけることができる。・・・自然は、なにも教わったり学んだりせずに、必要な処置を施すことができる。」(流行病 6-5-1)。

「医師にして哲学者(知恵を愛する者)である者は神にも等しい」(品位について5)

「人間愛のあるところに、医術への愛もまたあるのだから。つまり病人のなかには、自分の病気が非常に危険であると察知していても、医師の親切に感謝する気持をもつことによって回復に向かう人たちもいるからである。さて健康にするために病人を世話するのは

よいことだしまだ病気にかからないように健康者に注意をはらうこともそうである。こういうように健康者にも注意をはらうことはまた医師の品位にかなるからである。」(医師の心得6)。

考 察

医学教育とは

医学を教え伝えること、すなわち、医学の教育が医学教育なら、医学教育は医学の始まりからあったに違いないが、医学教育は「何を教えるか」と共に、「どう教えるか」と「どう評価するか」が問題となる。教師による学生の資質の評価、学生の成績に関する社会的評価、すなわち、入学試験と、医師国家試験の成績の評価、医師の態度の教育も重要な問題と考えられる。

「医学の教育」と「医学教育」とを、区別できるものではないが、『全集』の「誓い」、「法(医の本分)」、「医師について」、「品位について」、「医師の心得」、「診療所内において」には、医学以外に、医学をどう教えるか、医師になるための具体的な教え、医師の取るべき態度など、医学教育に直接関係する事項が記されている。また、学習意欲(motivation for learning)や、医師の社会的評価、医師としての評判にも触れており、ヒポクラテスで現代の医学教育の問題点が、すでに網羅されている。ということは多くの人が彼の影響を受けたと考えられる。本論考では、ヒポクラテスの医学教育と、その後世の医学教育への影響を考察する。

『全集』の検討には、真贋問題、成立年代、著者が誰か以外に、記述の矛盾点、写本での差異があり、どの個所を引用するかが問題となる^{1-3, 6)}。また、訳本では底本はどれかと、日本語訳は英、独、仏語訳からの重訳が多く、どう訳すか、それをどう解釈するかが問題となる。古典ギリシア語の日本語訳は、ヒポクラテスが2400年前の人物であることの時間的差異や、ギリシアと日本との地理的距離などからも、言語的に難しい点がある。本論考では、『全集』²⁾からの引用個所を明示し、訳文どおりに引用したが、原典¹⁾の意味をより明確に知るためには、原典のギリシア語の本来の意味を知る必要があると考えた。

「教育とは、教え育てること。人を教えて知能をつけること。人間に他から意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動」とある¹²⁾。教育学での定義としては、「教育とは、社会は体制を維持するために構成員としての個人を統制する。その手段として伝統的価値観や文化遺産を個人のなかに内面化させ、知識・技術・技能の伝達を図り、個人がそれらを確保することを促す。社会の側からの統制・維持の作用と、個人の側からの発達・適応・創造という2つの作用を弁証法的に実現する社会的いとなみが教育」とある。一方、学習とは、「経験や練習の結果とし

て生じる、比較的永続的な行動の変化をいう」、また、生涯教育とは、「1965年、ユネスコ国際成人教育推進委員会の提言による Lifelong Integrated Education (生涯にわたる総合された教育)が生涯教育」とある¹³⁾。

医学教育の問題点として、「良き医師や良き医学研究者を作ることが医学教育の基本的役割」、「医学教育における経済性、いかに効率的に知識 (knowledge)、技術 (skill) を学生に伝えるか」、「知識や技術とともに医師の患者に対する言動、態度 (attitude) の重要性」が指摘されている¹⁴⁾。

オスラーは「教育は外からの働きかけによる変化」とし、「教えること (to teach) そして考えること (to think) を大学の二つの機能とし、医学教育に、教養、医学の科学と技術を挙げ、特に、技術教育の困難さを強調し、「何を教えるか」よりも「いかに教えるか」に悩むと述べている¹⁵⁾。

現代の医学、医学教育、医の倫理上の問題点を、そのまま、ヒポクラテスに当てはめることは、必ずしも、妥当ではないかもしれない¹⁶⁾。

医学教育での師弟関係については、「ヒポクラテスの誓い」が有名である。医師の態度の一つとして、他の医師を批判してはいけないと述べている。一方、「流行病 6-3-18」では、恩師を批判している。近藤均は脚注で、「(ヘロディオスはヒポクラテスが師事したとされている医師。) 恩師格の人物さえ名指して公然と批判されている点に、当時の医療集団内部の自由闊達な雰囲気の一部をよみとることができる。」²⁾と述べている。

中世で、第二のヒポクラテスといわれているテラストラウス・フォン・ホーエンハイム、後に通称パラケルススと言われた人物 (1496~1541)¹⁸⁾は、「医術は一つの業である。業であるがゆえに、それはその師を実際に示さねばならぬ (彼の師匠を指し示しうる人)」と、教師の重要性を述べている。ヒポクラテスは τέχνη (テクネ、術) を重視しているが、パラケルススも同様と考えられる^{10, 18)}。

また、オスラー (1849~1919) は『平静の心』で、「教育制度 (あるいは大学) は教師の感化力なくしてはその機能を果たしえない。感化力あるところに生命あり (ニューマン, 1801~1890, 神学者, 大学の理念の著者より引用)¹⁵⁾」と述べている。

ヒポクラテスに影響を受けた人物

ガレノス (130~200年頃) はヒポクラテスの約600年後の人物で、ヒポクラテスについて多くの記載がある^{2, 17)}。良い医師の判定法や、初期修練と意欲の重要性を述べている。

「第一に、彼の知識の広さと解剖学の修練の深さを審査すべきである。第二に各器官の働きと役割を知っているか審査し、また食餌療法、一般療法、薬物の科学的論証法を弁えているかどうか調べる必要がある。」

書物の学習を怠っていて、修熟 (原文のまま) を示さないならば、もう実地の試験を行なう必要はない。(最良の医師を見分ける審査について8より抜粋)。「実際にはなにかを群集よりもよく知りたいと思っている者は、自らの本性と自らの初期修練とにおいて他の人びととすべてを遥かに凌駕していなければならない。彼が成人に達したときには、靈感を得た人のように、真理に対する熱い情熱を持っていなければならない。」(自然の諸力 [自然生命力] について10)¹⁷⁾。

『全集』にはどの病気が危険か、どのような状態で死ぬか記載されている。「誓い」では切石術は行なわず、専門の切石士が行なうとあるが、危険な手術と考えられていた^{2, 10)}。理髪医術から近代医術を創ったアンブロアズ・パレ (1517~1590) は、ヒポクラテスの教えを守ったのであろう、一回も切石術を行っていないと記されている⁷⁾。名医は怖さを知っていたに違いない¹⁰⁾。死の予見は重要な医術だったと考えられる^{2, 10)}。「予後」の項には、死相に関する記載があり、後にヒポクラテス顔貌といわれているが、その色彩の詳細な記載には感嘆させられる¹¹⁾。

近代での教育といえばルソーである¹⁹⁾。ルソー (1712~1778) の『エミール』²⁰⁾ (Émile ou L'Éducation, 1762, エミール —教育について—) は、「(男の子) エミールという生徒を、生まれたときから結婚するまで、一人の先生が自然という偉大な先生の指示にしたがって、どんなふうにみちびいていくか」という教育論で、人為を排して、子供を自然に育てることを重視している。

ルソーの教育を植物栽培になぞらえる考え方は、すでに、『全集』に認められるが、ルソーの教育論がヒポクラテスからの引用かは不明である。ルソーは、ホメロス、ツキュディデス、ピタゴラス、ソクラテス、プラトン、アリストテレス²¹⁾に触れている。ヒポクラテスについては、「ケルルス (紀元前一世紀、ローマの医者) は、・・・食養法はヒポクラテスの発明と報告している」と引用していることから²²⁾、ヒポクラテスについては、かなり詳しく知っていたと考えられる。

子供の教育を植物栽培になぞらえる考え方は、18世紀当時の教育論のプロトタイプ (祖型) の根底にある共通の考え方といわれている²³⁾。ルソーはモンテーニュ (1533~1592, 万巻の書を咀嚼したと言われている)、フェヌロン (1651~1715, 聖職者)、ロック (1632~1704, 哲学者、政治思想家) からの引用が多く、とくに、モンテーニュの引用が多いと言われているが²⁰⁾、どの箇所が引用かは、著者には不明である。

ヒポクラテスは戦陣医学を重視しているが (医師について14)、戦陣医学の重要性は、ホメロス (紀元前9世紀頃のギリシアの詩人) のトロイ戦争の叙事詩『イリアス』²⁴⁾に記載されている。近代になって、軍隊を強くするために、戦陣医学、とくに、衛生学を重視

して、軍制や教育制度に取り入れた人物として、医者ではないが、ナポレオン・ボナパルト(ナポレオン一世, 1769~1821)がいる²⁵⁻²⁷⁾。

フルクワ(1755~1809)^{25, 28)}は「読書はほんの少しだけにして、多くを見、多くのことを行え。(Peu lire, beaucoup voir et beaucoup faire)」と述べているが、この考えに基づいて国民公会に提出した医師養成計画は、後にナポレオンの意志により帝国大学に引き継がれ、「ナポレオン学制」¹³⁾と言われている。当時、ナポレオンの実用主義的な大学令に対抗して、ヘーゲル(1770~1831)が中心となってベルリン大学では、哲学を中心に諸学問を統合する理念が高まっていた²⁹⁾。理論よりも、患者がどういう症状なのかを訴えるのに耳を傾けるよう重視し、『医師の一瞥』(coup d'oeil médical)で、患者を優しく見つめ、ほとんど何も言わない前に、『どこが悪いか』を判断する²⁵⁾、このパリ学派の医術は、ヒポクラテスの診察法(診療所内において1)と一致する点がある。

フーフェラント(1762~1836)(ドイツ, 旧プロイセン)は、「医療はすぐれて医療的な実践である」と述べ、「患者に対する義務」、「世間に対する義務」、「同業者に対する義務」を挙げているが³⁰⁾、これには、「ただ人間だけを見るべし」、「患者を手段としてでなく目的としてみるべし」、「過失と良心」、「人情の機微に通じること」、「世間を尊重すること」、「同業者は互いに尊敬しあうこと」などがある。ヒポクラテスの考え方である。フーフェラントの『Die Verhältnisse des Arztes 医師の心得・態度』は、幕末の蘭方医杉田成卿(玄白の孫, 1817~1859)により、『医戒』と訳されている。

彼はワイマール時代(1783~1793)、「父の豊かな経験に基づくヒポクラテス流の指導のもと、初めて診療に従事したが、それは最高の学習となった。」と自伝で述べている。彼はここでゲーテ(1749~1832)の金曜会(勉強会のようなもの)に参加して、「長生術(Makrobiotik)」に関する研究を朗読して、イエーナでの教授への道が開かれた。ゲーテはドイツの文豪で、医師ではないが、ヒポクラテスを知っていたことが、自伝的作品である『詩と真実』に書かれている³¹⁾。

現代の医学教育論としては、オスラー(1849~1919)の『平静の心』が挙げられる。これには、ヒポクラテスや医学教育に関する記載が多い。「教育とは、在来の事実がわれわれに及ぼす働きかけによって起こる微妙な、かつ緩慢な変化にほかならない」「教育はすぐに芽は出ない。忍耐を要するものだ」、「患者を診ずに本だけで勉強するのは、まったく航海に出ないに等しいといえるが、反面、本を読まずに疾病の現象を学ぶのは、海図を持たずに航海するに等しい。」¹⁵⁾と、知識と経験の両者を重視している。

1919年「古き人文学と新しき科学」、この講演の原稿は病床にありながら書いた彼の最後の講演で、ヒポク

ラテスの忘れがたい言葉として、「自らの技術への愛と結びついた人間愛!—人間愛(philanthropia)と技術愛(philotechnia)—各人の中にあって働く喜びと同胞への真の愛が結びつく。……人類の願望がこの二つのもの、人間愛と技術愛の結合によって実現をみるかもしれない。その時こそ、知恵(wisdom)—哲学(philosophia)—から生まれた学問の正当性が証明されることになるだろう。」と述べている。

ヒポクラテスは、痛みのない処置(急性病の摂生法について2)、害のない処置(関節について78、流行病1-5)をするように述べている。

オスラーの『平静の心』には、17世紀の医師で、宗教家、思想家であるトマス・ブラウン卿(1605~1682)の「医師の信仰」を引用し、「自分が患者と同じ病を持たないことがあるが、そのとき私は患者に代わって病むことを望む。自分自身の窮状よりむしろ弱った患者の苦しみを癒したいと願う」と、患者への共感を寄せる医者であることを述べている¹⁵⁾。医者が病気になることは、決して悪いことではなく、患者に対する思いやりはここから生まれることが多い³²⁾。日野原重明は「患者学を学べ」と述べている³³⁾。

フェイドンは「『全集』は患者による同意にはふれておらず、また現代の医学倫理で扱われる話題や問題点は無視するか、あるいは形式的にふれているだけである。にもかかわらず、『ヒポクラテス全集』は、専門家の行為について述べたはじめての体系的な西欧の文献である。」と述べている³⁴⁾。

日本人では、石渡隆司は脚注で、「ガレノスは、ヒポクラテスが治療にさいしては医師ばかりでなく患者や看護人にも適切な役割を担うべきであると考えていたことを高く評価している。」(箴言1-1)と述べている²⁾。澤瀉久敬(おもだか ひさゆき)は「丁度クローバーの葉は三枚あってはじめて完全であるように、医療は医師、看護婦(看護師)、患者の三者の医道が揃って始めて完全となると考えられる。」と述べている³⁵⁾。

今井正浩は「術について」のまとめ(前注)で、詭弁によって医術の存在を否定しようという人たちについて、医術を擁護する側からの反論の書であるとのべている²⁾。死亡するかもしれないことを前提とする医師の判断と、生存することを前提とする患者の判断の差も考えられる。「少しでも良くするためにする」という判断と、「少しでも悪くなるからやらない」という判断を、同一の患者にする困難さである。救うことのできない患者に対する考え方、生死に関する教育、死亡教育、死生学(Thanatology)^{10, 36, 37)}とでもいうべき問題点である。

ギリシア語の日本語訳

『全集』の「法」では、教育は διδασκαλία(ディダスカリア, 教え, 教育, 訓練,)と, μάθησις(マテシス, 知る

こと、学ぶこと、学習、学ぶ能力、知ろうとする意欲、教育)³⁸⁾が用いられている。Loeb¹⁾では、*διδασκαλία* は *teaching*, *μάθησις* は *learning*, 大槻マミ太郎²⁾は、前者を教育、後者を習得、または、教育と訳している。*παιδομαθίης* (パイドマティエス) は、Loeb¹⁾では、*instruction from childhood*, 大槻マミ太郎²⁾は幼少からの教育と訳している。ルソーはワロー (前一世紀ローマの博物者)、または、ノニウス・マルケルス (四世紀の文法学者) の引用として、古代では教育は「養うこと」を意味しており、養うこと (*nutricius*)、しつけること (*paedagogus*)、教えること (*magister*) に区別している²⁰⁾ (ラテン語、仏語の日本語訳は原文のまま)。

ヒポクラテスは教育を、*διδασκαλία* (ディダスカリア、教育)、*μάθησις* (マテシス、教育、習得、または、学習) と、*παιδομαθίης* (パイドマティエス、教育、または、訓育、しつけとも訳される) と、使い分けている。

ἰητορίη (イエトリエ、イオニア方言; *ἰατορία*, イアトリア) は、使用されている個所により、医術とも、医学とも、医療とも訳される。ただし、どれを用いても、偏りがあるように感じられる。英語の *medicine* も医学、医術、医療と訳せる。

澤瀉久敬は³⁵⁾「医学の哲学」で、医学概論を *ἰατορία*, イアトリアの学, *iatrologie* (医 + 学, 医の学) と造語し、「医学には学、術、道の三つをそなえることによって始めて完全な医学となるのである。」と述べている。そして、言葉の混乱を避けるために、狭意の医学と、広意の医学と言う言葉を用いている。橋田邦彦は³⁹⁾、「医学」、「医道」以外に「医」を用いている(「医」の「」は原文のまま)。両者共に、*ἰατορία*, イアトリア, *medicine* の日本語訳に苦労したと推測される。

日本語の漢字は造語力に富んだ言葉で、医に次の言葉を連結することにより、医の学、医の術、医の道、医の者は、医学、医術、医道、医者となる。オスラーは科学(サイエンス)、技術(アート)とキリスト教的愛(チャリティ)を挙げているが¹⁵⁾、医学、医術、医道に相当するものと考えられる。本論考では、イアトリアは、引用個所では編訳者の用法に従い、著者は広意の医学の意味で医学を(例: ヒポクラテスの医学教育)、また、一部では、医を用いた(例: ヒポクラテスの医)。

治療には、*θεραπεύω* (テラペウオ) と *ἄκεσις* (アケシス) が用いられている。*θεραπεύω* (テラペウオ, *therapy* の語源と考えられる) には、奉仕する、尊崇する、世話をする、面倒をみる、ご機嫌をとる、養う、育む、大切にすること、看護すること、治療すること、(動物を) 訓練すること、土地の面倒をみるの意味がある³⁸⁾。*ἄκεσις* (アケシス) は治療、治癒である³⁸⁾。

「医師について2」では、「初心者は診療所での治療である」²⁾の治療は、*θεραπεύω* (テラペウオ) が用いられているが、Loeb¹⁾ の「医師について2」では *treat*, 「痔について」では、*therapy* と訳している。

「医師の心得1」では、「治療には時間がかかる」²⁾の治療は、*ἄκεσις* (アケシス) で、Loeb¹⁾ では、*healing*, 大槻訳²⁾ では治療である。*ἄκεσις* (アケシス) は治療、治癒の両方に訳せるが、ここでは治癒の意味に取れる。ヒポクラテスの時代、すでに、治療と治癒は別と考えられていたようである。ただし、*θεραπεύω* (テラペウオ) には、奉仕するという意味もあることから、治療とは、本来、患者を大切にすること、面倒をみることで、初心者はまずそれを学ぶ (*μανθάνω*, マンタノ, 学ぶ, 覚える, 理解する) と解釈されるかもしれない。

δίαιτα (ディアイタ) は生活様式、暮らし方、食生活、飲食物、生活の場所、住居の意味がある³⁷⁾。近藤均は脚注で、「食餌法」と訳したのは *δίαιτα* (ディアイタ), つまりダイエットであるが、この語はかならずしも狭義の食餌療法を表しているのではなく、むしろ「摂生法」とか「養生法」、あるいは「生活法」と訳したほうがよいと述べている。(食餌法について第二巻 25, 26, 27)²⁾。

φύσις (ピュシス) の訳は、自然、自然の秩序(理法)、起源、素質、本性、外見であるが³⁸⁾、今井正浩は脚注として、「人為を加えない生来のままの本性」、「人体に生来そなわっている病気を治癒し健康を保つ調整機能をさす。」(流行病 6-5-1)、岸本良彦は「急性病の摂生法について 9 [35]」では、自然性と訳し、ラテン語で *natura* (*nascor*, 生まれるに由来し、英語の *nature* はここから派生) と、大槻マミ太郎は、「自然、自然性、本性」と訳し、ここでは「天性、天分、天賦の才能」の意味にとり、「神の配剤」という考え方が強くでている(法、医の本分2)と述べている²⁾。

φύσις (ピュシス, 自然) の対立として、*νόμος* (ノモス, 慣習、掟、法) を、「人為的」の意味に用いる場合がある^{29,40)}。『全集』では、*νόμος* (ノモス 法) の項で、*τέχνη* (テクネ, 術、医術) について述べている。アンブローズ・パレには、「わたしが患者に包帯し、神が彼を癒し給うた」(“Je le pansay, Dieu le guarit.” 古いフランス語の綴りのまま)⁴¹⁾ という有名な言葉があるが、『全集』では「病気を癒す者は自然 (*φύσις*, ピュシス) である」(流行病 6-5-1)²⁾ としている。

パレは病を癒すものを神 (*Dieu*) として、医術に対応させているが、ギリシア語の自然 (*φύσις*, ピュシス) と神 (ギリシア語の神 *θεός* テオス, ラテン語の神 *deus* ローマの神; *Deus* イエス・キリスト) には、相通ずるものもあると考えられる。ただし、ギリシア語の神、ラテン語の神、キリスト教の神とでは、性格が異なると考えられる⁴²⁾。

στοργή (ストルゲ), *ἀγάπη* (アガペ), *ἔρως* (エロス), *φίλος* (フィロス) は、何れも日本語訳は愛であるが、日本語の愛は、その意味を表現しがたい言葉である。*στοργή* (ストルゲ) は親子の愛, *ἀγάπη* (アガペ) は神の愛, 聖餐, *ἔρως* (エロス) は性愛, 情愛, *φίλος* (フィ

ロス)は親愛, 友情, 親しいである³⁸⁾. 『新約聖書』では ἀγάπη (アガペ) が用いられているが⁴³⁾, 神(キリスト)の(われわれに対する)愛, 神(キリスト)に対する愛であるが, 兄弟愛, 男女間の愛にも用いられている⁴⁴⁾. 「お大切」との訳もある⁴⁵⁾. 『全集』では φίλος (フィロス) が用いられており, 人間の愛, 友人の愛の意味と考えられる.

τέχνη (テクネ) は『全集』では医術と訳されるが, 最も重要な言葉の一つである^{10, 42)}. τέχνη は術, 技巧, 技術, 技芸, 学問 (現代的な意味での学問, 芸術, 技術などをすべて含めた広い意味で用いられることが多い), 手段, 方法である³⁸⁾. τέχνη に対応する言葉として, σοφία (ソフィア) があるが, σοφία は, 技術・技芸に秀でていること, 巧みさ, 熟練, 術知, 利口さ, 利発さ, 聡明さ, 知恵, 才知, 知識, 学識の意味である³⁸⁾. τέχνη (テクネ, 術) と σοφία (ソフィア, 知) との境界は, 必ずしも明確ではなく, 知には術の意味が, 術には知の意味が含まれているようである^{38, 42, 46, 47)}.

「医師にして哲学者 (知恵を愛する者) である者は神にも等しい」(品位について 5), 「人間愛のあるところに, 医術への愛もまたある」(医師の心得 6) は, 多く引用されている. オスラーはヒポクラテスの言葉として, 人間愛 (philanthropia), 技術愛 (philotechnia), 哲学 (philosophia) をあげている¹⁵⁾. これは, φίλος (フィロス) に, ἄνθρωπος (アントロポス 人間) τέχνη (テクネ 術) σοφία (ソフィア 知) を接続させた言葉で, 『全集』の, φιλοθωπιᾶ (フィロアントロピア), φιλοτεχνία (フィロテクニア), φιλοσοφία (フィロソフィア) の英語の直訳で, いずれも臨床医にとって大事なことである.

φιλοσοφία (フィロソフィア) は, 知を愛し求めること³⁸⁾, 愛知である. φιλοτεχνία (フィロテクニア) は技術に熱心なこと³⁸⁾, 技術を愛し求めること, 愛術である. φιλοθωπιᾶ (フィロアントロピア) 人間愛は, 人間を愛するで, ここでは患者を愛するとも訳せる. ただし, 「患者を愛する」は日本語の語感では, 必ずしも妥当な訳とはいえない. φίλος (フィロス) は親しむで, 大切にすることも考えられる. 「知, 術, 人, 患者に親しむ, 「人, 患者に親切にする」, または, 「知, 術, 人, 患者を大切にすることも考えられるが, どの訳が妥当かは不明である. 徳川時代のキリシタンは, アガペ, 愛を「お大切」と訳している⁴⁵⁾.

現在, φιλοσοφία (フィロソフィア) の日本語訳は, 哲学が定着した. 哲学は西周 (にし あまね, 1829-1897, 文政12-明治30年, 島根県の藩主亀井家の侍医) の訳語であることは, 彼の著書『百一新論』(明治七年三月) によって明白といわれている⁴⁸⁾. 彼は「ヒロソヒ」を「希哲学」, または「希賢学」と翻訳した. それは「ヒロソヒ」の原意を汲み, 「賢哲であることを希う (こいねがう) 学問」という意味であった. 後に

この語が簡略化され, 「哲学」として流通するようになった⁴⁹⁾.

φίλος (フィロス) 愛するを, 「哲」と訳するのは無理があるが, もし, φιλοσοφία (フィロソフィア) が「哲学」と訳されるなら, φιλοτεχνία (フィロテクニア) は「哲術」⁴⁶⁾と訳されないか. 知を愛したソクラテスが哲学者なら, 術を愛したヒポクラテスは, 「哲術者」といえないか.

ὑπηρετής (ヒュペレテス) は, 仕える者, 下僕, 召使, 奉仕者, 従者, 家来, 部下, 助力者, 助手の意味である³⁸⁾. 「医師は医術に奉仕するもの ὑπηρετής (流行病 1-5 [11]) で, 医術を奉仕者にするものではない. 「医師は医術に奉仕するもの」とは, φιλοτεχνία (フィロテクニア) 術を愛する, 術を大切にすること, 術に親しむ, 哲術に通ずる考え方である.

著者注: Loeb¹⁾ の Hippocrates 1, 2, 4 巻は Jones 訳, 5, 6, 8 巻は Potter 訳で, 部位により, 訳語が異なる箇所がある.

要 約

ヒポクラテスは医術を習得することは, 植物の成長に通じると述べている. 医学の知識を本当に身に付けて自分のものにしようと思うものは, 生まれつきの資質, 教育, 教育の場所, 幼少からの教育, 勤勉, 年月が必要である. ここではじめに必要なものものは生まれつきの資質である. というのも, 資質がふさわしくなければ, すべては無駄になる. しかし, 資質が申し分なければ, つぎにくるのは術の教育である. 医学教育は, 医学以外に, 幾何学, 数学, 天文学, 環境医学を含んでいる. 病気については, 患者を救うかあるいは傷つけないようにする. 医術はつぎの三から成っている. 病気と患者と医師である. 医師は医術に奉仕する者である. 患者は医師と協力して病気に対処するようにしなければならない. ヒポクラテスの医学は医学の原点であるが, ヒポクラテスの医学教育も同様に医学教育の原点である.

参考文献

- 1) Hippocrates. Translated by Jones WHS, Potter P. Loeb classical library Hippocrates. Cambridge, Massachusetts, London: Harvard University Press; 1992, 1995.
- 2) 大槻真一郎訳編. ヒポクラテス全集. 東京: エンタープライズ; 1985-1988.
- 3) 今裕訳編. ヒポクラテス全集. 東京: 名著刊行会; 1978.
- 4) 小川政恭. ヒポクラテス 古い医術について. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 1996.
- 5) 小川政恭. 西洋医学史. 東京: 真理社; 1947: p. 66-135.
- 6) ライオンズ アルバート, ペトルセリ R ジョセフ.

- ヒポクラテス. 小川鼎三監訳. 図説 医学の歴史. 2巻. 東京: 学研; 1988. p. 193-216.
- 7) マイヤーシュタイネック・ズートホフ. 図説医学史. 小川鼎三監訳. 東京: 朝倉書房; 1996. p. 24-51.
- 8) ジェッター ディーター. 西洋医学史. 山本俊一訳. 東京: 朝倉書店; 1996. p. 48-71.
- 9) 二宮陸雄. 知られざるヒポクラテス. 東京: 篠原出版; 1990. 29, 31, 107.
- 10) 齊藤博. ヒポクラテスの謎. 東京: 図書印刷; 1996.
- 11) 齊藤博. ヒポクラテス顔貌の色彩検討. 埼玉医科大学雑誌 2000;27:127-34.
- 12) 新村出編. 広辞苑. 東京: 岩波書店; 1998. p. 687.
- 13) 若井邦夫, 室井修, 島田修一, 渡辺弘純. 教育小事典. 平原春好, 寺崎昌男編. 東京: 学陽書房; 2003. 28, 63, 167, 249.
- 14) 檜学. 医学概論の構築に向けて. 檜学, 島久洋編. 医学概論. 東京: 朝倉書店; 1997. p. 1-2.
- 15) オスラー・ウィリアム. 平静の心 オスラー博士講演集. 日野原重明, 仁木久恵訳. 東京: 医学書院; 2000. 32, 135, 147, 219, 288, 406, 484.
- 16) ヴィーチ ロバート M. ヒポクラテスの誓いとそれに対する異議申し立て. 品川哲彦, 後藤博和, 岡田篤志, 伊藤信也訳. 生命倫理学の基礎. 大阪: メディカ出版; 2004. p. 13-38.
- 17) 二宮陸雄. ガレノス 自然生命力. 東京: 平川出版社; 1998. p. 132, 159, 298.
- 18) パラケルスス. J・ヤコビ編, 大橋博司訳. 自然の光. 東京: 人文書院; 1996. p. 89, 129, 140, 142.
- 19) 中野光, 平原春好. 教育学. 東京: 有斐閣; 2002. p. 7-14.
- 20) ルソー. エミール. 今野一雄訳. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 2001. p. 上巻24, 32.
- 21) 桑原武夫編. ルソー研究. 東京: 岩波書店; 1968. 邦文文献 47.
- 22) ルソー. 人間不平等起源論. 本田喜代治・平岡昇訳. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 2002. p. 48.
- 23) 小笠原道雄. 教育の哲学. 東京: 放送大学教育振興会; 2003. p. 83.
- 24) ホメロス. イリアス. 松平千秋訳. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 1996. p. 76, 355.
- 25) ルメール, ジャン=フランソワ. ヨーロッパ近代医学の祖. 皇帝ナポレオン [大ナポレオン展] カタログ. 東京: 東京富士美術館; 1993. p. 37.
- 26) コレンクール. ナポレオン ロシア大遠征軍潰走の記. 東京: 時事通信社; 1986. p. 50, 122, 175.
- 27) ジョンソン. ナポレオン. 東京: 岩波書店; 2003. p. 66, 188.
- 28) コンドルセ. フランス革命期の公教育論. 阪上孝編訳. 人物略伝3. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 2002. p. 298.
- 29) 山脇直司. ヨーロッパ社会思想史. 東京: 東京大学出版会; 2002. p. 5, 113.
- 30) フーフェラント. 自伝/医の倫理. 杉田絹江, 杉田勇訳. 東京: 北樹出版; 1995. p. 32, 80, 88-128.
- 31) ゲーテ. 詩と真実, わが生涯より. 山崎章甫訳. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 1997. p. 3-15
- 32) 齊藤博. 前立腺肥大症患者の視点からみた経尿道的前立腺摘除術. 泌尿器外科. (投稿中)
- 33) 日野原重明. 患者になった医師からのメッセージ. 東京: 自由国民社; 2003.
- 34) フェイドン・R・ルース, ビーチャム・L・ナンシー. インフォームド・コンセント. 酒井忠昭, 秦洋一訳. 東京: 三陽社; 1994. 10, 18, 52.
- 35) 澤瀉久敬. 医学の哲学 増補. 東京: 誠信書房; 1996. p. 37, 251.
- 36) 山本俊一. 死生学. 東京: 医学書院; 1996.
- 37) 齊藤博, 山田卓巳, 渡邊徹, 鎌田成芳, 福田博志, 長浜克志, 他. 泌尿器科患者死亡統計と死生学. 泌尿器外科2000;13:1095-100.
- 38) 古川晴風編. ギリシャ語辞典. 東京: 大学書林; 1976.
- 39) 橋田邦彦. 生体の全機性. 東大生理学同窓会編. 橋田邦彦全集. 東京: 協同医書出版社; 1977. p. 223.
- 40) 落合仁司. ギリシャ正教 無限の神. 東京: 講談社; 2001. p. 80.
- 41) 川喜多愛郎. 医学概論. 東京: 真興交易医書出版部; 1996. p. 23.
- 42) 齊藤博. ヒポクラテスの箴言「人生は短く, 術のみちは長い」について. 埼玉医科大学医学基礎部門紀要. (投稿中)
- 43) Tasker RVG. The Greek New Testament. Oxford University.
- 44) 岩隈直著. 新約ギリシャ語辞典. 東京: 山本書店; 2000.
- 45) 大塚隆, 名取四郎, 宮本久雄, 百瀬文晃編. 岩波キリスト教辞典. 東京: 岩波書店; 2002.
- 46) 齊藤博. ラファエロの「アテネの学堂」について ヒポクラテスは西洋哲学史でどのように評価されていたか? 埼玉医科大学進学課程紀要 1998;7:77-84.
- 47) 齊藤博. 論考 ヒポクラテスと「ラファエロの「アテネの学堂」について (齊藤, 1998)」の補注. 埼玉医科大学医学基礎部門紀要 2002;9:9-20.
- 48) 浅井茂紀. 倫理学の語源. 東京: 高文堂出版社; 1978. p. 2.
- 49) 加藤信朗. ギリシア哲学史. 東京: 東京大学出版会; 1996. p. 4.